

性的メディア接触が大学生の 性意識に与える影響に関する研究

Sexually explicit media exposure and the influence on college students' attitudes towards sex

佐々木 輝美 Sasaki, Teruyoshi

● 国際基督教大学 International Christian University



メディア効果, ポルノ, メディア暴力, 情報の流れ, 青少年育成
Media effects, Pornography, Media violence, Information flow, Youth development

ABSTRACT

The main purpose of this study was to examine how sexually explicit media would affect college students' attitudes towards sex. Previous study results based on Gerbner's theory of cultivation would suggest that students exposed to sexually explicit media would accept distorted sexual information or behavior depicted in the media. A survey was conducted to investigate this relationship among college students (N=350). The survey consisted of eight items probing sexual media exposure and their attitudes toward sex. χ^2 analysis results indicated a positive correlation between the items of sexual media exposure and attitudes toward sex. The discussion further considers details surrounding the mechanism of accepting distorted sexual information, media exposure, the formation of attitudes and the roles of peers.

はじめに

ポルノを含む性的メディアが与える影響についての研究は古くて新しいテーマであると言える。とくに最近ではインターネットの普及によって、性情報へのアクセスがかなり容易になり、その影響が懸念される。また、性描写と暴力を関連づけた研究結果も多く提出されてきた。そのような状況の中で、日本におけるこの領域の研究はそれほど多くはないと言える。メディアの影響研究では、混乱を避けるために認知、情意、行動のどのレベルの影響を対象とするかの区別が重要であると考えられるが、本研究では主に認知的影響のレベルに主眼を置き、メディアの中の歪んだ情報が受け手の意識の中に受け入れられてしまうというカルティベーション論に基づきながら、性的メディア接触と青少年の性意識との関連について実証的な研究を行うことにする。

1. 研究の背景～カルティベーション論を中心に～

ポルノが与える効果・影響の理論的説明については、生理的覚醒 (arousal=興奮状態になり攻撃性が増す)、観察学習 (observational learning=見たものを模倣する)、脱感作 (desensitization=強い刺激に対して徐々に慣れてしまう)、カルティベーション (cultivation=メディア世界での出来事を現実として受け入れてしまう)、そしてカタルシス (catharsis=代理経験によって気分がすっきりする) などがある。

上記の中で、カタルシス以外の理論については、議論の余地があるとされながらも、ポルノ対策の必要性を説く際の根拠となることが多い。これに対し、カタルシスについては、これを支持する研究は「全くないということではないが、乏しい」(Hariss, 1994, p. 254) とされている。「全くないということではない」という点については筆者も同感である。例えば心理的な治療でカタルシス効果が用いられることもあるので、可能性を全面的に否定するものではない。しかしながら、このカタルシス理論を以ってポルノの無害性を説くにはあ

まりにも証拠が乏しいと言える。

また、メディアの影響研究を検討する場合、影響のレベルを考慮することが重要である。メディアの影響は基本的に、認知、情意、そして行動の3つのレベルが考えられる。認知レベルでは、例えば多くの情報の中から特定のものに注目してそれを選び出し、そしてその情報を理解する場合が考えられるが、メディアの場合、内容が歪められていることが多いので、そのような情報を鵜呑みにして受け入れてしまうことが問題とされている。情意の場合も同様で、例えば本来であれば嫌悪感を抱いたり、苦痛であったりするはずの性的行動を快楽的に描いたりすると、そのような歪められた感情を伴って性情報を受け入れ、歪んだ態度が形成される恐れがある。以上の2つのレベルは先に挙げたカルティベーション効果と関連があると考えられる。

本研究の理論的背景にはカルティベーション分析を当てはめることができるので、その詳細について述べたい。Gerbnerら(1986)によると、カルティベーション分析は文化指標 (cultural indicators) と呼ばれるプロジェクトの一領域に位置づけられる。他の二つの領域は制度過程分析とメッセージ・システム分析である。制度過程分析は、大量のメディア・メッセージの流れを管理する政策組織の研究に関わるものであり、メッセージ・システム分析とは、テレビ世界の特徴を客観的に明らかにするための内容分析としてとらえることができる。

カルティベーション分析はメッセージ・システム分析で得られた結果を基準とし、テレビ・メッセージ接触と視聴者の信念や行動との関係を明らかにすることを目的とする。つまり、テレビ番組の内容分析に基づいて得られたテレビ世界の特徴と比較しながら、それらが人々の信念や行動と関係していることを明らかにすることである。

以上のような視点を持つカルティベーション研究は、まずテレビ・メディアの位置づけについての議論から始まる。Gerbnerら(1976, p. 175)は、テレビは人々の態度や行動を変容させるものではなく、人々に社会様式などを浸透させたり、定着さ

せたりする (enculturation) 役割を持つものとしてとらえている。このようなテレビ機能のとらえかたは、後に Gerbner ら (1980) が提唱する主流形成 (mainstreaming) という概念と深く関係している。彼らによれば、主流形成とは、「テレビに多く接触することによって、(テレビ以外の) 他の要因や影響によって自然に生じてくる見解や行動の差が和げられたり無くなったりすること (Gerbner 他, 1994, p. 28)」を意味する。

Gerbner らはこのようにテレビを位置づけた上で、人々はテレビの世界と現実の世界を混同し、テレビの世界を現実世界のものとして受け入れてしまうことがあることを指摘し、テレビ視聴過多の人ほどこの傾向が強いのではないかという仮説を示している。この視点はもちろん性文化や性に対する態度にも当てはめることができ、性に対する歪んだ考えや行動を描写するメディアに多く接触することにより、それらを現実のものとして受け入れてしまうことが予想される。

以上は認知面と情意面での議論であるが、最後に行動レベルの影響について述べたい。特に行動レベルでは、視聴した性的行動を模倣することが考えられる。歪んだ性情報に接し、それに対して好意的な態度を持つことで、行動への準備性が高くなると考えられる。例えばメディアにおける性描写において、男性の暴力的性行動を女性が進んで受け入れるシーンが多く見られる。そのような、いわば歪められた性行動に頻繁に接した場合、カルティベーション効果が生じ、そのような態度を現実のものとして受け入れてしまう可能性がある。この状態になると行動の準備性が高まり、そして準備性が高まった時に、何らかの機会が与えられれば行動に移される可能性が高くなる。もちろん、メディアが人々に影響を与える場合、常にこのような順番で生じるということではない。情意レベルの影響から始まる場合もあれば、いきなり行動レベルから始まる場合もあるが (Chaffee & Roser, 1986)、認知・情意の順に影響を受けている場合、行動に移される可能性は高くなっていると言えよう。

さらには、ポルノには中毒性があると言われていいる。もちろん全ての人がそうなる訳ではなく、

賢く対応できる人もいるが、例えば Reed (1994) は、ポルノ中毒症によって、学業に専念できなくなったり仕事を辞めたりするなど、社会生活に問題をきたす可能性があることも指摘している。

以上のように、メディアにおける性描写は様々な側面において影響をもたらしていると考えられるが、本論文の中でこれら全てを網羅することは到底不可能である。そこで、先述のようにカルティベーション効果に関連する部分を扱い、性的メディア接触と大学生の性に対する許容度との関連性を明らかにすることを目的としたい。

また、補足的な理由であるが、青少年に対して研究調査を行う場合、具体的な性的行動に関する質問はプライバシーの程度がかなり高いので聞きにくいということがある。さらには、性情報にあまり接していなかった児童生徒を、調査票によって目覚めさせてしまうという理由で、教員や保護者など、現場での協力が得られない場合も多い。このような倫理的な側面も考慮し、本研究では前述のカルティベーション効果を中心に据え、性的メディアが主に認知や情意のレベルに与える影響について論じていきたい。

2. 調査

2.1. 調査方法

性的メディアへの接触経験と青少年の性意識の関係を調べるために、2002年6月に、埼玉県にある私立大学生350名(男子104名、女子246名)を対象に調査を行った。ここでの主な狙いは、「性的メディアに多く接すること」と、「性に対する許容度」や、「性に対する歪んだ認識」との関係調べることである。

主な調査項目は以下の通りであるが、⑤⑥以外は『青少年と生活環境等に関する調査研究報告書』(警察庁生活安全局少年課編, 2002年)で使用された調査項目を参考にした。下記の①で得られたデータをもとに、いずれかのメディアに1つでも接触したことがある者を性的メディア接触群、接触が全くない者を非接触群とし、これら両者間で②～⑧の質問に対する答えに差があるかどうかを

検討した。

- ① 性的メディア接触（ポルノコミック，グラフィック雑誌・ヌード写真集，ティーン雑誌，アダルトビデオ，テレクラ・ツーショットダイヤル，インターネットのアダルトサイト，裸やセックス描写のあるゲーム，スポーツ新聞のエッチな記事，出会い系サイト，など）
- ② 「同じ年くらいの方がセックスをすること」についての考え。
- ③ 「同じ年くらいの女性が，見知らぬ人（知り合ったばかりの人）とセックスをすること」についての考え。
- ④ 「お互いの同意があれば，誰とセックスしてもかまわない」と思うかどうか。
- ⑤ 「罰せられる恐れがないとしたら，同意が得られなくても，好意を持っている相手にキスするかもしれない」と思うか。
- ⑥ 「罰せられる恐れがないとしたら，同意が得られなくても，好意を持っている相手にセックスをせまるかもしれない」と思うか。
- ⑦ 「キスをしていてもいい時期と考えるのはいつ頃から」だと思うか。
- ⑧ 「セックスをしていてもいい時期と考えるのはいつ頃から」だと思うか。

2.2. 調査結果

調査の結果，全般的に性的メディアに接している者の方が，性に対して許容的な傾向が見られた。以下，各項目ごとに結果を示すことにする。

表1「同じ年くらいの方がセックスをすること」では，3セル(35.7%)が期待度数5以下であるため χ^2 検定は行っていないが，単純に割合を見てみると，「性的メディア接触群」では「したければ

でもよい」と答えた者は54.4%で，非接触群の42.1%より12.3ポイント高くなっており，「同じ年くらいの方がセックスをすること」に対して許容的な傾向が読み取れる。

また，性的メディア接触群で「愛し合っていればよい」と答えた者の割合は41.7%であるのに対し，非接触群では53.8%となっており，非接触群の方が12.1ポイント高くなっていることが分かる。つまり，非接触群の方は「愛しあっていること」を条件にしている者が多く，セックスを真面目に捉えている傾向が読み取れる。

表2は，性的メディア接触群と非接触群とで，「同じ年くらいの方が，見知らぬ人（知り合ったばかりの人）とセックスをすること」についてたずねた結果である。 χ^2 検定の結果，人数の偏りは有意であったので($\chi^2(2)=12.9, p<.01$)，残差分析を行ったところ，表3に見られるように，「問題であるが本人の自由」と「してもかまわない」の2つの回答について有意な差が見られ，性的メディア接触群の方がセックスに対する許容度が高いことが分かった。

例えば，表2の「性的メディア接触群」を見ると，「してもかまわない」と答えた者は18.3%で，非接触群の5.8%より12.5ポイント高くなっていることがわかる。また，性的メディア接触群で「問題であるが本人の自由である」と答えた者の割合は65.4%であるのに対し，非接触群では75.8%で，非接触群の方が10.4ポイント高くなっており，「同じ年くらいの方が，見知らぬ人とセックスをすること」は本人の自由としながらも，問題であると捉えていることが読み取れる。

表4は性的メディア接触群と非接触群とで，「お互いの同意があれば，誰とセックスしてもかまわないと思うか」をたずねた結果である。 χ^2 検定の結

表1 「性的メディア接触」と「同じ年くらいの方がセックスをすること」

		まだだめ	愛しあっていれば 良い	したければ してもよい	わからない	合計
性的メディア 接触	あり	1.0%	41.7%	54.4%	2.9%	100% (103人)
	なし	0.8%	53.8%	42.1%	3.3%	100% (240人)
全体		0.9%	50.1%	45.8%	3.2%	100% (343人)

表2 「性的メディア接触」と「同じ年くらいの女の子が見知らぬ人とセックスをすること」

		しては いけない	問題であるが 本人の自由	しても かまわない	合計
性的メディア 接触	あり	16.3%	65.4%	18.3%	100% (104人)
	なし	18.3%	75.8%	5.8%	100% (240人)
全体		17.7%	72.7%	9.6%	100% (344人)

$\chi^2=12.9, p<.01$

表3 調整済み残差一覧

	しては いけない	問題であるが 本人の自由	しても かまわない
接触あり	-0.4	-2.0*	3.6**
接触なし	0.4	2.0*	-3.6**

* $p<.05$, ** $p<.01$

表4 「性的メディア接触」と「同意があれば誰とセックスしてもかまわない」

		そう思う	そう思わない	分からない	合計
性的メディア 接触	あり	51.0%	26.0%	23.1%	100% (104人)
	なし	34.6%	27.5%	37.9%	100% (240人)
全体		39.5%	27.0%	33.4%	100% (344人)

$\chi^2=9.76, p<.01$

表5 調整済み残差一覧

	そう思う	そう思わない	分からない
接触あり	2.9**	-0.3	-2.7**
接触なし	-2.9**	0.3	2.7**

* $p<.05$, ** $p<.01$

果、人数の偏りは有意であったので ($\chi^2(2)=9.76, p<.01$), 残差分析を行ったところ、表5の残差の一覧表に見られるように、「そう思う」と「わからない」の2つの回答について有意な差が見られた。そこで表4の具体的な数字を見ると、「性的メディア接触群」では、「そう思う」と答えた者は51%で、非接触群の34.6%より16.4ポイントも上回っていることが分かる。

表6は性的メディア接触群と非接触群とで、「罰せられる恐れがないとしたら、同意が得られなくても、好意を持っている相手にキスするかもしれないと思うか」をたずねた結果である。同意が得られなくてもキスをするということは、裏返せば無理やりにキスをするということであり、性暴力に発展する可能性がある項目である。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意であり ($\chi^2(1)=5.88, p<.05$), 性的メディア接触群では、「そう思う」と答えた者

は27%であるのに対し、非接触群で「そう思う」と答えた者は14.9%に留まっており、接触群の方が相手からの同意が得られなくても一方的にキスをする行動に出る可能性があることが読み取れる。逆に、接触群で「そう思わない」と答えたものの割合は73%であるのに対し、非接触群では「そう思わない」と答えたものの割合は85.1%となっており、非接触群の方が同意無しのキス行為に関して自制的な傾向が見られる。

表7は性的メディア接触群と非接触群とで、「罰せられる恐れがないとしたら、同意が得られなくても、好意を持っている相手にセックスをせまるかもしれないと思うか」をたずねた結果である。同意が得られなくてもセックスをするということは、乱暴な行動であり、性暴力そのものであると言えるかもしれない。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意であり ($\chi^2(1)=11.42, p<.01$), 性的メディア

表 6 「性的メディア接触」と「罰せられなければ同意がなくてもキスをする」

		そう思う	そう思わない	合計
性的メディア 接触	あり	27.0%	73.0%	100% (89人)
	なし	14.9%	85.1%	100% (195人)
全 体		18.7%	81.3%	100% (284人)

$\chi^2=5.88, p<.05$

表 7 「性的メディア接触」と「罰せられなければ同意がなくてもセックスをする」

		そう思う	そう思わない	合計
性的メディア 接触	あり	14.3%	85.7%	100% (91人)
	なし	3.7%	96.3%	100% (218人)
全 体		6.8%	93.2%	100% (309人)

$\chi^2=11.42, p<.01$

表 8 「性的メディア接触」と「キスをしてもいい時期」

		小6 - 中3	高校	高卒後	分からない	合計
性的メディア 接触	あり	63.5%	14.4%	1.9%	20.2%	100% (104人)
	なし	58.4%	15.5%	1.7%	24.4%	100% (238人)
全 体		59.9%	15.2%	1.8%	23.1%	100% (342人)

$\chi^2=0.94, n.s.$

接触群では、「そう思う」と答えた者は 14.3% であるのに対し、非接触群で「そう思う」と答えた者は 3.7% に留まっており、接触群の方が 10.6 ポイント上回っていることが分かる。逆に、接触群で「そう思わない」と答えたものの割合は 85.7% であるのに対し、非接触群では「そう思わない」と答えたものの割合は 96.3% となっている。

以上の表 6 と表 7 から言えることは、性的メディア接触により歪んだ性情報や性行動を現実のものとして受け入れ、半ば性暴力的な態度が形成されているかもしれないということである。

表 8 は性的メディア接触群と非接触群とで、「キスをしてもいい時期と考えるのはいつ頃から?」についてたずねた結果である。選択肢は 11 項目を設けたが(小6, 中1, 中2, 中3, 高1, 高2, 高3, 高卒後, 20 以上, 結婚してから, 分からない), 表を分かり易く整理するため 3 つに分け, 小6 から中3 までを「小6 - 中3」, 高1 から高3 までを「高校」, 高卒後から結婚してからを「高卒後」とした。

「キスをしてもいい時期と考えるのはいつ頃から?」の答えの割合については、有意差は見られず、両群とも「小6 - 中3」を選んでいる者の割合

がほぼ同数で 6 割前後を占めていることがわかる。キスについてはテレビドラマや CM など、様々な場面で頻繁に描写されており、より早い年代にキスをする事への抵抗感が無くなっていることが読み取れる。

表 9 は性的メディア接触群と非接触群とで、「セックスをしてもいい時期と考えるのはいつ頃から?」についてたずねた結果である。 χ^2 検定を行った結果、人数の偏りは有意であったので($\chi^2(3)=15.0, p<.01$), 残差分析を行った結果、表 10 の残差の一覧表に見られるように、「小6 - 中3」および「高卒後」の 2 つの回答について有意な差があることが分かる。

表 9 を見ると、セックスをしていい時期を「小6 - 中3」と答えた者の割合は、「性的メディア接触群」では、18.3% であるのに対し、非接触群では 6.8% となっており、接触群の方が 11.5 ポイント上回っている。一方、セックスをしていい時期を「高卒後」と答えた者の割合は、接触群では 14.4%、非接触群では 24.7% となっており、非接触群の方が 10.3 ポイント高くなっている。以上のことから、性的メディア接触群の方がより早い年代にセックスをしてもいいと思っていることが分かる。

表9 「性的メディア接触」と「セックスをしてもいい時期」

		小6 - 中3	高校	高卒後	分からない	合計
性的メディア 接触	あり	18.3 %	48.1 %	14.4 %	19.2 %	100 % (104人)
	なし	6.8 %	41.7 %	24.7 %	26.8 %	100 % (235人)
全体		10.3 %	43.7 %	21.5 %	24.5 %	100 % (339人)

$\chi^2=15.0, p<.01$

表10 調整済み残差一覧

	小6 - 中3	高校	高卒後	分からない
接触あり	3.2**	1.1	-2.1*	-1.5
接触なし	-3.2**	-1.1	2.1*	1.5

* $p<.05$, ** $p<.01$

3. 考察

3.1. 歪んだ情報の受容

前項で得られた結果から、性的メディアに接触している者の方が、性に対して寛容な態度を持っていることが分かった。ここではまず、この結果の意味について解釈し、次にどのようにして情報が偏るのかを考えてみたい。

調査の結果、7項目のうち5つにおいて、性的メディア接触群の方が、性に対してより寛容な態度が見られた。差が見られなかったのは、「同じ年くらいの人とセックスをすること」および「キスをしてもいい時期と考えるのはいつ頃から?」についての答えであった。これらに差が見られなかったのは不思議ではないと言える。例えば、前者の質問の場合においては、調査対象者は大学生であったので、「同じ年くらいの人」は大学生を意味することになる。従って、性的メディアに接していてもいなくても、大学生でセックスをすることに抵抗感はないのだと考えられる。この点に関連して、興味深い調査結果が『2002年調査・児童・生徒の性』で報告されている。これによると、性交を「経験済み」と答えた都内の高校3年生女子は45.6%で、3年前の調査結果と比べて6.6ポイント上昇していると報告されており、セックス経験の時期が徐々に早まっていることが伺える。

では、有意差が見られた5つの項目を2つのグループに分けて考えてみたい。最初は以下の3つであり、これらに関して歪んだ情報を受け入れた場合は、性感染症や妊娠など、自己の心身の問題

に発展する可能性がある項目である。

- ・「同じ年くらいの女性が、見知らぬ人（知り合ったばかりの人）とセックスをすること」
- ・「お互いの同意があれば、誰とセックスしてもかまわない」
- ・「セックスをしてもいい時期と考えるのはいつ頃から」だと思うか。

知り合ったばかりの人とセックスをしたり、人を選ばずにセックスをしたり、あるいはセラー服を来た女性がセックスをするといったシーンは様々な性的メディアで描写されている。性的メディアにおいては、受け手の注目を引くために特異な性情報や性行動を誇張し、メディアの中だけの世界を作り上げる。これらの、いわば作られた世界と現実世界を区別することができれば、Weaver (1991) も紹介しているようにポルノは有益な娯楽として機能するのであろう。しかし、研究の背景でも述べたように Gerbner のカルティベーション論によれば、性的メディアに多く接するとメディアの中の歪められた情報を現実のものとして受け入れてしまう恐れがあり、本研究で得られたデータはこの点を支持するものである。

次に、以下の2つの項目について検討する。これらに関して歪んだ情報を受け入れた場合は、上記の項目の場合と異なり、他者に害を与えることにもなりかねない。

- ・「罰せられる恐れがないとしたら、同意が得

られなくても、好意を持っている相手にキスするかもしれない」

- ・「罰せられる恐れがないとしたら、同意が得られなくても、好意を持っている相手にセックスをせまるかもしれない」

これらはいわゆる性暴力に関連する項目である。つまり、同意が得られなくても自分が相手を好きなら無理やりキスをしたりセックスをしたりする行動につながりかねない内容である。このようなシーンは性的メディア、とくにポルノでよく見られるが、娯楽目的として視聴者を引きつけるために描写されるものであり、もちろん現実世界で許される行為ではない。しかしながら、先のカルティベーション論を応用すれば、これらの内容を含む性的メディアに頻繁に接することで、そのような歪んだメディア内容を現実のものとして受け入れてしまうことが予想される。ここでの2つの質問はあくまでも「罰せられる恐れがなかったら」という想定のものであり、実際の行動をたずねたものではないが、統計的に有意な結果が得られたということは、行動には出なくても意識の上ではそのような反社会的行動を是認するものとして捉えることができる。

3.2. 性情報の偏り

～メディア接触および仲間集団の影響～

性情報が溢れている現代社会においては、歪められた性情報や、反社会的な性行動が描写されるメディアに接触する機会が多くなっている。その手段もコンピュータや携帯電話のインターネット機能の充実によってますます容易になっている。ここで問題なのは、青少年がそれらの情報を、大人を介することなく簡単に入手できるようになったことである。つまり、大人の影響が及びにくくなっていると言うことができる。

青少年に影響を与える源として伝統的に存在したのが学校、家庭、そして地域社会だと考えられる。しかし最近はこれらに加えてメディアが大きな影響力を持つようになったと言われている。そしてそのメディアはハード面でもソフト面でも高

度に進化しつつある。これに対して、学校、家族、そして地域社会の影響力や教育力が低下し、相対的にメディアの影響力が大きくなっていると考えられる。大人が青少年に介入する機会が減少してしまったと言える。この関係は図のように表すことができ、線の太さが影響力の大きさを表している。そのようにして、大人を介さずに得られたメディア情報の中には歪んだ性情報が多く含まれていることが予想され、青少年の間に歪んだ性情報が偏って存在している可能性が考えられる。

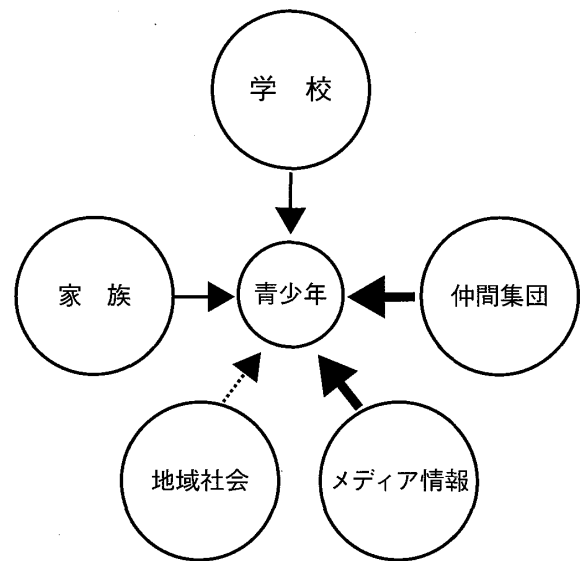


図 影響源の五角形

(コミュニケーション量と影響力の偏り)

(佐々木, 2001, 『青少年問題』, p. 36)

そして、仲間との直接的コミュニケーションの可能性を飛躍的に高めた携帯電話の出現は、この歪んだ性情報の偏りをさらに強めている可能性がある。つまり、携帯電話によって、1日24時間、親などの大人を介さずに直接仲間とコミュニケーションが取れる状況が出現したため、これによって性情報が主に仲間集団の間で交換されるようになった。しかし、そこで偏った性情報が交換される可能性が高く、結果的にそれらの情報に多く接触する青少年の意識の中に歪められた性情報が受け入れられてしまうということになる。

それでは、青少年が歪んだ性情報を安易に受容

することを避けるためにはどうしたらよいのだろうか。1つは、青少年がそのようなメディア内容に容易に接触できないような仕組みを作ることである。これに関しては、メディア側に自主的な規制、あるいはインターネットであればフィルタリングソフトの有効利用などが考えられる。2点目として、有害情報に抵抗力のある青少年を育成するためのメディア・リテラシー教育が考えられる。しかし、有効なメディア・リテラシー教育を行うためには、カリキュラムや教材の開発、そして最も重要な要因としてそのような教育を行うことができる教員の養成があげられる。そして最後に、図に示されているような弱まってしまった学校、親、そして地域の影響力(=コミュニケーション)をとりもどすことが考えられる。とくに家庭や地域社会においては、青少年が興味を持って日常的に参加できるような場所の提供が必要であろう。そのような場において、大人と子どもが自然にコミュニケーションを持つことにより、偏った影響力を正常に戻すことが必要であると考えられる。

おわりに

本研究では、Gerbner のカルティベーション論を援用し、性的メディア接触が歪んだ性情報の受容を促進し、その結果として青少年の性に対する態度が寛容になっているのではないかと推測した。大学生 350 名に対する調査から得られたデータを分析したところ、上記の仮説を支持する結果を得ることができた。しかしながら、関連性は示すことができたものの、これによって因果関係が証明されたわけではない。影響のメカニズムの解明を含めて、今後さらに研究を蓄積する必要があるだろう。

また、昨今のメディアの進化は目覚ましいものがある。基本的にどのような表現が望ましいのか、あるいは望ましくないのかの基礎研究、望ましくないものをどのような仕組みで青少年、とりわけ子どもから遠ざけることができるのか、さらには有害情報に触れることがあったとしてもそれに対する抵抗力のある子どもを育てるためのメデ

ア・リテラシー教育など、取り組むべき問題は山積している。

以上の問題を同時進行的に解決していくことが必要であるのはもちろんであるが、我々は最も重要で、かつ基本的なことを忘れるべきではないだろう。それは、生(なま)の環境における家庭や学校、あるいは地域社会での子ども同士、大人同士、そして大人と子ども同士の自然でダイナミックなコミュニケーションであり、メディアはこれ以上に子ども達に大きな影響を与えることはできないであろう。メディアはあくまでも「セカンド・ベスト」なのである。

参考文献

- Allen, M. (1995). A meta-analysis summarizing the effects of pornography II. *Human Communication Research*, 22(2), 258-283.
- Berkowitz, L. (1993). *Aggression: Its causes, consequences, and control*. New York: McGraw-Hill.
- Chaffee, S. & Roser, C. (1986). Involvement and the consistency of knowledge, attitudes and behaviour. *Communication Research*, 3, 373-399.
- Gerbner, G., & Gross, L. (1976). Living with television: The violence profile. *Journal of Communication*, 26, 173-199.
- Gerbner, G., Gross, L., Morgan, M., & Signorielli, N. (1980). The mainstreaming of America: Violence profile No. 11. *Journal of Communication*, 30, 10-29.
- Gerbner, G., Gross, L., Morgan, M., & Signorielli, N. (1986). Living with television: The dynamics of the cultivation process. In J. Bryant & D. Zillmann (Eds.), *Perspectives on media effects* (pp.17-40). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Gerbner, G., Gross, L., Morgan, M., & Signorielli, N. (1994). Growing up with television: The cultivation perspective. In J. Bryant & D. Zillmann (Eds.) *Media Effects* (pp.17-41). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Harris, R.J. (1994). The impact of sexually explicit media. In J. Bryant & D. Zillmann (Eds.) *Media Effects* (pp.247-272). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- He, Z. (2001). Pornography, perception of sex, and sexual callousness: A cross-cultural comparison. In Kamalipour, Y.R. & Rampal, K.R. (Eds.), *Media, Sex, Violence and Drugs in the Global Village* (pp. 131-152). Rowman & Littlefield Publishers.
- 警察庁生活安全局少年課編 (2002年)『青少年と生活環境等に関する調査研究報告書』

- Malamuth, N.M., & Donnerstein, E. (1984). *Pornography and sexual aggression*. Academic Press.
- Reed, D.R. (1994). Pornography addiction and compulsive sexual behavior. In Zillmann, D., Bryant, J. & Huston, A.C. (Eds.). *Media, children, and the Family* (pp.249-269), Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 佐々木輝美 (1996) 『メディアと暴力』 勁草書房
- 佐々木輝美 (2001) 携帯電話の所有と青少年のコミュニケーション行動 『青少年問題』 第48巻4号, 30 - 36
- 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会編 (2002) 『2002年調査・児童・生徒の性』 学校図書
- Weaver, J. (1991). Responding to erotica: Perceptual processes and dispositional implications. In Byant, J., & Zillmann, D. (Eds.). *Responding to the screen: Reception and reaction processes* (pp. 329-354), Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.